11

病院医療の歴史的始原

――わが国の療病院と古代インドの福徳医薬舎

亥口勝彦
奈良市役所　市立奈良診療所

病院医療の始原つまり病院施設での医療で最も古い歴史的事例として、国内では大阪・四天王寺の療病院を、国外では古代インドにおける福徳医薬舎を採り上げ発表する。

一、大阪・四天王寺の療病院

昭和三八年、大阪で開催された第十六回日本医学会総会で頒布された、佐伯定胤・法隆寺貫主の講演録『仏教と薬療』には「四天王寺は、只今残って居りますのは、創立当時の僅かに四分の一であります。最初は四箇大院より成り立って居たのである。四箇大院とは敬田院、悲田院、施薬院、療病院の四つである。・・施薬院は薬を作ってこれを施し与へる所である。療病院は病人を看護する所であります。・・実にこの大阪は我国最初の病院設置の場所である医学文化の発祥地であります」と講演されたと記されている。『日本歴史大辞典』（河出書房）も"四院"の項は「敬田院とは聖徳太子が建立した四天王寺の別称であるが、その寺垣外、東西八町・南北六町の寺域の西北角に施薬院、東北角に悲田院、北中間に療病院が建っていた」と説明している。四天王寺の建立は通常、推古元年の五九三年。四院のうち悲田院などはわが国の社会福祉施設の嚆矢として既に周知のことであるが、四天王寺と一緒にあった療病院もわが国最初の病院医療の事例として再認識したいと考える。

二、古代インドの福徳医薬舎

求法の中国僧・法顕がインド歴訪（三九九～四一三年）を記録した『法顕伝』は、当時のインドの大国・マガダ国について「其国長者居士各於城内立福徳医薬舎。凡国中貧窮孤独残跛一切病人。皆詣此舎種種供給。医師看病随宜飲食及湯薬皆令得安。差者自去」（その国の長者や居士は各々、城中に福徳医薬舎を建立し、凡そ国中の貧窮、孤独、身障、一切の病人は皆、この舎

館に来て種々の供給を受ける。医師は病を看て宜しく飲食と湯薬を給付し、皆が安楽を得るようにする。治癒した者は自ら去る）と、福徳医薬舎の存在と状況が記されている。また「立福徳舎。屋宇床臥飲食供給行路人及出家人来去客」（福徳舎を立て、屋舎、寝台、飲食を行路人および出家人、旅行客に供給する）と、同類の福徳舎が記されている。法顕訳の福徳舎は梵語のプニャ・シャーラ（功徳の家）の逐語訳で、もう一人、七世紀に訪印した玄奘は『大唐西域記』で「多有福舎。以贍貧匱。或施薬或施食」（福舎が数多く有り、以って貧窮者を贍恤し或いは施薬し或いは飲食を施す）と、福舎と訳している。また同じ玄奘の『慈恩伝』には「達摩舎羅。唐言福舎。王教所立。使招延行旅給贍貧乏也」（ダルマシャーラは唐に福舎と言う。王の教え立てる所。行旅の人を招延し貧乏な人に給贍せしむなり）とあって、福舎が王教所立で〝ダルマ（法）の家〟とも呼ばれていたのが判る。以上から、古代インドにあった福徳医薬舎は、王教所立のダルマの家（福舎）に属し、特に病人らが対象の収容医療施設即ち病院であったと考えられる。

（考察）前者の四天王寺の療病院は、聖徳太子の仏教信仰に基づいた国家的社会事業の一環として誕生した。後者の古代インドの福徳医薬舎に関して、中村元『インド古代史』には貧民救済や病院設立など仏教の慈悲の精神にもとづいた社会施策は、西洋より遥かに先駆けてアショーカ王（在位は紀元前二六八―二三二年）に始まり、以後インドの社会的伝統として法顕のインド歴訪の時代にもなお存続していたと解説している。アショーカ王は全インドを統一したマガダ国マウリヤ王朝三世、殺戮の征服戦争を悔恨して仏教に帰依し、ダルマによる治世につとめ、法の実行のため法勅文を石柱や磨崖に刻んで布告した。福舎や福徳医薬舎が王教所立でダルマの家と呼ばれたのは、アショーカ王の教化と王のダルマの具現を意味していて、古代インドの病院医療がアショーカ王の仏教精神による社会施策から始原したことを物語っている。